「ツキトサルスベリ」

写真学科　吉野弘章　Hiroaki Yoshino

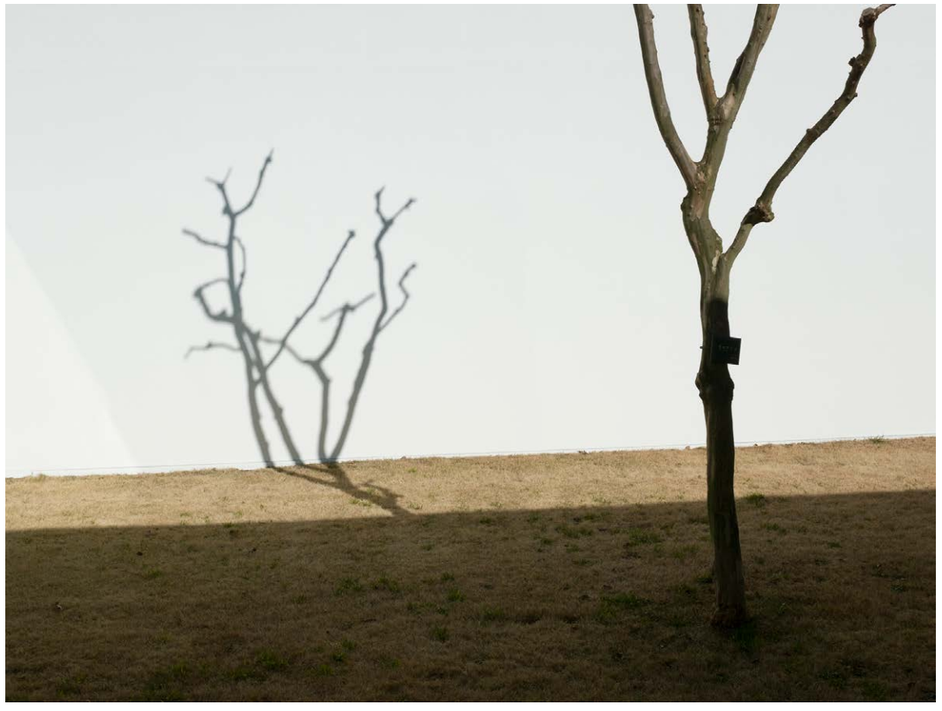
「ある日夜空にきれいな月を見つけ、その時に思わずお電話をいたしました…」
あるロマンスの始まりは、ある日の月の仕業だったらしい。

三島由紀夫の遺作となった四巻からなる長編小説に『豊饒の海』がある。
明治から昭和を舞台として、夢と転生をモチーフに、四巻の物語が数珠のようにつなげられているのだが、その最終巻の不可解なラストは、夏の日ざかりの寂莫とした禅寺の何もない庭の光景で終わる。

タイトルとなる「豊饒の海」とは、月の東半球に位置する海の一つであり、海といいながら何もない砂漠のようなところだそうだ。三島は、最後の小説を執筆しながら、そんな月の海に何を思ったのであろうか。

私もまた、そんな月にロマンを抱きながら、地上において日々の暮らしと向き合う。

平成 29 年の正月、見上げると夜空に月と金星がランデブーしていた。かつて一度たりとも意識したことはなかったが、その晩の月と金星の天空での逢瀬に、はかない夢を見たような気がした。それはまるで、無と無限の織りなす時空の旋律ようにも感じられた。

この作品は、さながら天空と地上を往還する宇宙船の窓から見えた光景のようなものかもしれない。

1965 年 東京生まれ。東京工芸大学大学院芸術学研究科修了。
1980 年代より写真展の企画、作家のマネージメント、オリジナル・プリントのディーリングなどに携わる。2003 年に日本写真協会新人賞、日本写真芸術学会賞を受賞。専門はアート･ディーリング、マーケット史、写真編集、エキシビション・デザインについてなど。